

レポート

調査レポート

# エンタープライズにおける 生成AIの今後の動向



Powering the API world

# 本レポートについて

複雑化が進むLLMエコシステムの課題解決に業界が取り組む中、Kongは、550名のKongユーザー、開発者、エンジニア、ITリーダーを対象とした調査を実施し、企業でのLLM導入について、プロフェッショナルとしての見識、意向、懸念を尋ねました。

## 72% 25万ドル

LLMへの支出が  
増えると回答

約40%の回答者の  
LLMの年間支出額

自社のLLMへの支出がこの1年間で増えるとした人は72%でした。また、LLMへの年間支出額が現時点で25万米ドル以上とした人は37%でした。

2025年第1四半期はGoogleのモデルの使用が急増し、69%の人が使用していました。一方、同じ期間にOpenAIのモデルを使用した人は55%でした。この結果をもって、最も導入されているLLMはGoogle Geminiだと結論付けることはできませんが、2025年初めにGoogleがユーザーを大きく引き付けたことがわかります。

## 69%

2025年初めに  
Googleの  
モデルを使用

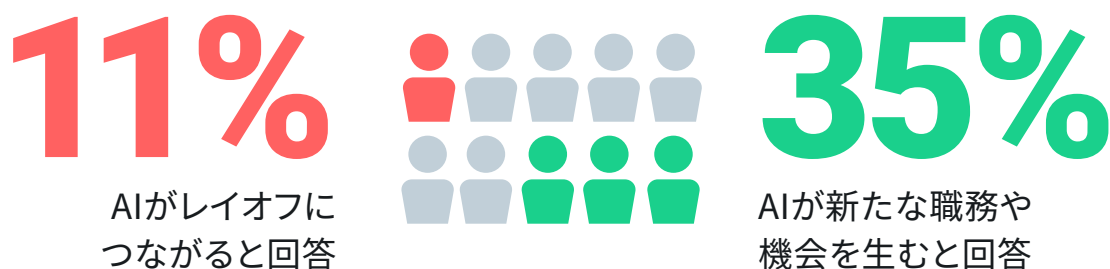
## 80%

会社での  
DeepSeekの使用を  
検討してもよいと回答

地政学的要因との結び付きや、潜在的なプライバシー上の問題が、米国での導入の障壁になるとの見方もありましたが、DeepSeekは急速に拡大しています。2025年第1四半期にDeepSeekを使用した人は17%、会社でDeepSeekの使用を検討するとした人は80%でした。この結果からわかるように、LLM市場は猛スピードで変化しており、AIの導入が企業の経営上の優先事項となる中で、有力なLLMプロバイダがユーザーの獲得競争を繰り広げています。

一方でITリーダーは、主にセキュリティとデータプライバシーに関して、明確な懸念を示しています。LLMを導入するうえでの**最大の障壁としてセキュリティを挙げた人は44%以上**に及びました。また、LLMプロバイダを選択する際の最大の判断材料としては、セキュリティとデータプライバシーへのコンプライアンスが挙げられました。ここからわかるように、企業はLLMがもたらす変革の可能性を認識している一方で、ビジネスに不可欠なシステムとLLMのモデルを安全に統合することに、依然として大きな不安を抱えています。

そのほか、今回の調査で得られた主な結果は次のとおりです。

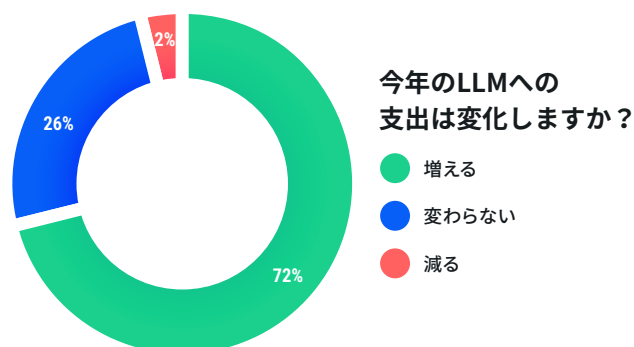


# 企業のLLM導入： 傾向と課題

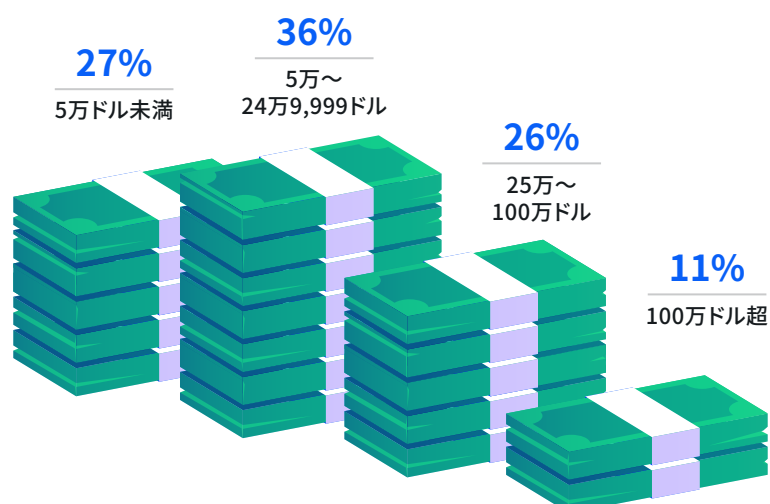
Kongは、550名のユーザー、ソフトウェア開発者、エンジニア、ITリーダーを対象として、2025年第1四半期時点でのLLM導入の意向について調査を実施しました。

## 72%は2025年にLLMへの支出を増やす意向

企業で大規模言語モデル（LLM）の導入が急増しています。[Gartner](#)によると、生成AIアプリケーションや生成AIのAPIを導入している企業は、2023年にはわずか5%だったのが、2026年には80%以上となる見通しです。この急拡大からも明らかのように、LLMは二義的なテクノロジーから事業開発や生産性の土台へと進化を遂げました。



## LLMへの年間支出額



導入の増加に連動して、支出の見通しも増えています。自社のLLM支出がこの1年間で増えると回答した人は72%でした。また、現時点でLLMに多額の支出を行っている企業のうち、支出額が5万ドル以上の企業は73%、25万ドル以上の企業は37%に上ります（金額は米ドル）。

# 2025年初めに使用したモデルは GoogleがOpenAIを上回る

企業のLLM活用は引き続き加速し、テクノロジーの優先順位の変動や、競争優位性の再定義が生じています。一方で、ライバル争いには耳目が集まります。LLMプロバイダの競争は、いずれか1社が後続を引き離す状況になっているのでしょうか。

今回の調査では、2025年初めにGoogleのモデルを使用した人は69%、OpenAIのモデルを使用した人は55%でした。

2025年初めに使用されたLLMプロバイダのモデル

|   |        |     |    |              |     |
|---|--------|-----|----|--------------|-----|
| 1 | Google | 69% | 5  | DeepSeek     | 17% |
| 2 | OpenAI | 55% | 6  | Anthropic    | 13% |
| 3 | Meta   | 38% | 7  | Stability AI | 6%  |
| 4 | IBM    | 26% | 8  | xAI          | 6%  |
|   |        |     | 9  | Ollama       | 4%  |
|   |        |     | 10 | Cohere       | 4%  |
|   |        |     | 11 | AI21 Labs    | 4%  |
|   |        |     | 12 | Mistral AI   | 3%  |

## Google Geminiは最も導入されているLLM？

この結果をもって、最も導入されているLLMはGoogle Geminiだと結論付けることはできません。しかし、この数か月間にGoogleがユーザーを大きく引き付けたことがわかります。

LLMで先頭を行くと一般に見られていたOpenAIのモデルより、Googleのモデルを使用した人が多かったのはなぜなのでしょう。これは、投資、価格攻勢、劇的に高まった存在感が相乗効果を発揮したためとみられます。

AlphabetのCEO、Sundar Pichai氏は2024年10月、AIインフラや生成AIソリューション、その他のクラウド製品が伸びて第3四半期の売りが大きく増えたときの発表で、AIへの投資が「実を結んだ」と発言しました。

また、翌四半期に同氏は、機械学習とLLMデプロイのためのクラウドプラットフォームであるGoogle Vertex AIについて、ユーザー数が1年で5倍増えたと説明しました。

Googleは強力な開発者エコシステムと、Google CloudやGoogle Workspaceを通じて企業の環境内に確立された統合により、各社のチームは簡単にGoogleサービスの利用を拡大できます。Googleは2024年、Google Workspace（Gmail、Google ドキュメント、Google Meetなど）にGeminiを統合し、2025年2月にはGemini 2.0を公開しました。その過程で同社は、AIにフォーカスしたスタートアップ企業を取り込むための無料クレジットやリソースを提供しました。

こうした一連の取り組みは、LLM市場におけるGoogleの競争優位性を明確に示しています。同社には、膨大なユーザー基盤や、企業での存在感、そして無尽蔵と言えるほどの金融リソースがあります。

## LLMをめぐる争いは引き続き混戦模様

GoogleとOpenAIのすぐ後を追っているのが、MetaとIBMのモデルです。2025年第1四半期にMetaのモデルを使用した人は38%、IBMのモデルを使用した人は26%でした。

いずれか1つのLLMが覇権を握ることは、現在も、そして今後もないかもしれません。LLMはそれぞれ得意なタスクが異なりますし、LLM界に衝撃を与える新たなバージョンや企業も絶えず登場します。さらに、開発者は今後の展望として、複数のモデルをユースケースに応じて使い分けることになると考えています。プロプライエタリとオープンソースのLLMを組み合わせるハイブリッドのアプローチが最良と回答した人は37%でした。（詳しくは後ほど説明します）。

## LLMのデプロイプラットフォームの上位はMicrosoft Azure AIとOpenAI

LLMのモデルの提供やアクセスのために開発者が使用しているデプロイプラットフォームは、Microsoft Azure AI（デフォルトのモデルの多くはOpenAI製）とOpenAI Platformが上位となりました。回答者が2025年第1四半期に使用したプラットフォームは、**Microsoft Azure AIが45%で1位、OpenAI Platformが41%で2位でした。**

すぐ後を追うのはGoogle Vertex AIで、第1四半期の使用は35%でした。IBMとAWS Bedrockもそれぞれ24%と16%で、まずまずのシェアを獲得しています。この結果からわかるように、LLM市場は断片化し、激しい競争が生じています。

2025年初めにモデルの提供やアクセスに使用されたプラットフォーム

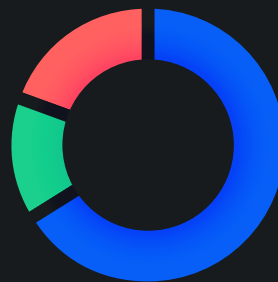
|                             |     |                             |     |
|-----------------------------|-----|-----------------------------|-----|
| 1 <b>Microsoft Azure AI</b> | 45% | 5 <b>AWS Bedrock</b>        | 16% |
| 2 <b>OpenAI Platform</b>    | 41% | 6 <b>Anthropic Platform</b> | 9%  |
| 3 <b>Google Vertex AI</b>   | 35% | 7 <b>Hugging Face</b>       | 7%  |
| 4 <b>IBM</b>                | 24% | 8 <b>AI21 Studio</b>        | 5%  |
|                             |     | 9 <b>Cohere Platform</b>    | 4%  |
|                             |     | 10 <b>Ollama</b>            | 4%  |

# 80%は会社でのDeepSeekの使用を検討すると回答

中国のAIスタートアップ企業DeepSeekが2025年1月にリリースした最新モデルDeepSeek R1は、競合他社のモデルに匹敵する性能を備えつつも、トレーニングのコストが格段に低いとの発表で脚光を浴びました。これを受けて、AppleのApp StoreではDeepSeekのチャットボットのダウンロード数が急増し、OpenAIのChatGPTを上回りました。また、この騒動はAI関連株の暴落の引き金にもなり、NVIDIAの時価総額は史上最大の下げ幅を記録しました。

DeepSeekはまたたく間に絶大な関心を集め、2025年第1四半期にDeepSeekを使用した人は17%でした。

また、米国での導入に関しては、地政学的要因との結び付きや、潜在的なプライバシー上の問題が障壁になるとの見方もありましたが、今回の調査では、**80%の人が、会社でのDeepSeekの使用を既に検討したか、検討するつもりがあると回答しました。**



あなたの会社はDeepSeekの使用を検討するつもりがありますか？

- はい
- 既に実施
- いいえ

一方で、懸念の声も確かにあります。DeepSeekを使わないと回答した人のうち、**プライバシーの懸念を理由に挙げた人は68%でした。また46%は、社内で禁止令が出ていると回答しました。**

このように、情勢は目まぐるしく変化しています。ここからわかるように、企業は選択肢を入念に比較検討して、イノベーションの追求と、セキュリティ、コンプライアンス、ガバナンスといった現実的な懸念とのバランスを図っています。

## DeepSeekを採用する要因

- 総合的なパフォーマンス 68%
- コスト効率 61%
- カスタマイズ性と柔軟性 43%
- オープンソースの方がよい 30%



## DeepSeekの使用を控える要因

- プライバシーの懸念 68%
- 会社が使用を認めない 46%
- 他のモデルの方が優れている 23%
- 内在するバイアス 11%

## LLMを選ぶうえでの優先事項は 回答が割れる

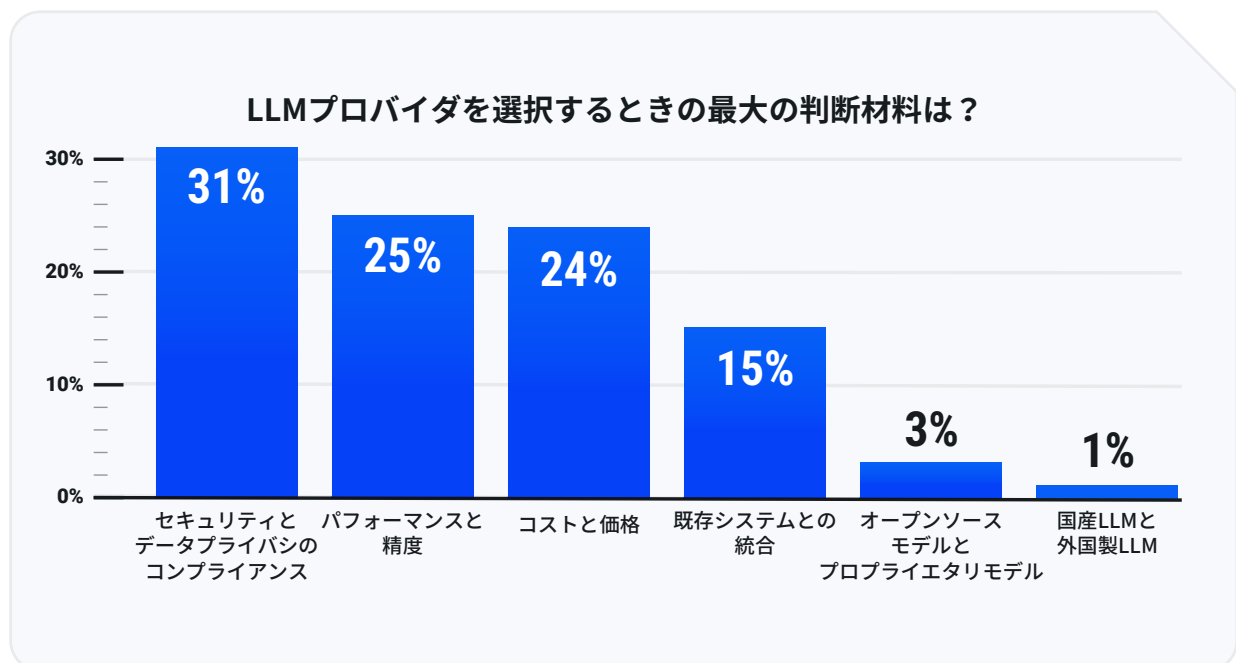
企業はLLMプロバイダを選ぶときに何を重視し、意思決定の判断材料にしているのでしょうか。

プロバイダを選択するときの最大の判断材料について、**31%の人は、セキュリティとデータプライバシーのコンプライアンスと回答しました**。その後は僅差で、パフォーマンスと精度が25%、コスト効率が24%でした。

上位3つの回答がほぼ均等に割れたことが示すように、今後のLLMはいずれか1つが明確な勝者にな

ることはなさそうです。企業にはそれぞれ固有の技術要件があり、モデルにはそれぞれ得意なタスクがあります。

当然ながら、企業はセキュリティの重要性を認識しつつ、投資から具体的かつ实际的なリターンを確保するという面にも同じく重きを置いています。したがってテクノロジーリーダーは、コストや精度で妥協することなくイノベーションを追求するという難しい舵取りを迫られています。



## LLMの最重要ユースケース

|   |                             |     |
|---|-----------------------------|-----|
| 1 | AIベースのチャットボットと<br>カスタマーサポート | 27% |
| 2 | コード生成と開発者の<br>生産性向上         | 26% |
| 3 | 顧客対応サービス                    | 16% |
| 4 | APIの文書化と連携                  | 15% |
| 5 | AI強化型のセキュリティと<br>脅威検知       | 14% |
| 6 | その他                         | 2%  |

## LLMの主な用途はカスタマーサポートと開発者の生産性向上

LLMの最も中心的なユースケースとなったのは、カスタマーサービスの自動化と「セルフサービス」の実現です。AIベースのチャットボットとカスタマーサポートをLLMの最重要ユースケースとした人は27%でした。

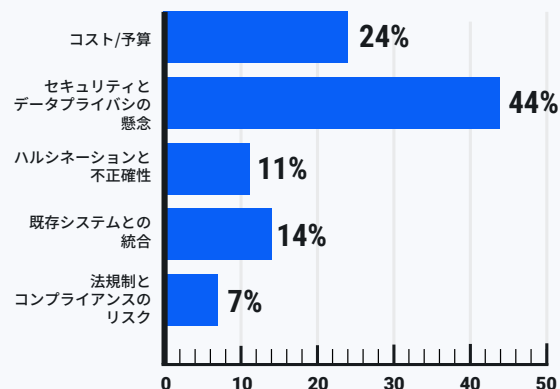
2位はコード生成と開発者の生産性向上で、1位と僅差の26%でした。AIを活用したソフトウェア開発でコーディング作業の合理化と効率化を図ることへのニーズが表れています。

## セキュリティとデータプライバシーはLLM導入の大きな障壁

企業は、LLMを活用して自動化や顧客サービスを強化し、イノベーションを推進するにあたって、セキュリティ、精度、統合、コンプライアンス、コストに関する重要なリスクにも対処しなくてはなりません。

データコンプライアンスに関する責務がますます複雑化する中、LLMにデータガバナンスポリシーを適用する方法について懸念している企業は非常に多くあります。自社にLLMを導入するうえでの最大の課題として、**44%の人はセキュリティとデータプライバシーを挙げました。**

## LLMを導入するうえでの最大の課題



対処すべき課題にはかなり多くの項目が並んでいますが、生成AIがもたらす効率化やメリットは非常に大きく、見過ごすわけにはいきません。

# 39%

予算と統合の  
課題に直面

LLM導入の最大の障壁として、24%の人はコストと予算の制約を挙げました。LLMの導入には膨大な投資が必要です。多くの企業は、LLMの導入で期待されるROIと、導入に伴うコストの高さとの兼ね合いに苦勞しています。一方で、既存システムとの統合の難しさを挙げた人が14%いたように、既存のアーキテクチャにAIを組み込むことは技術的に複雑です。

## LLMのハルシネーションが導入の遅れの原因に

セキュリティと予算は重要な問題ですが、ハルシネーションや不正確なアウトプットといったAI固有の課題も、導入を難しくする要因となっています。LLM導入の最大の課題として、11%の人はハルシネーションと不正確性を挙げました。

一方で、こうした課題に事前に対処するために、強固なガバナンスやセキュリティプロトコルを取り入れる企業は、LLMのポテンシャルをフル活用するうえで有利です。

LLMのハルシネーションを減らすための一般的な手法の1つが検索強化型生成（RAG）です。この手法では、より正確な回答をエンドユーザーに返すために必要なドメイン固有のデータに、LLMが直接アクセスします。

RAGを自動化してLLMのハルシネーションを着実に抑制する方法について、[Kongのブログ](#)で詳しい情報をご覧ください。

**Automated RAG**  
Hallucination-Proof Your LLMs

自動化RAGによるLLMハルシネーションの  
解消へ

Adam Jiroun  
Kong シニアプロダクトマーケティングマネージャー



# 規制が厳しい業界でのAIプロジェクトの安全な導入

機密性の高い顧客データやビジネスデータを扱う企業は、AIアプリケーションの成果とコンプライアンスの両方を常に確保しなくてはなりません。

しかし、サービスを迅速に開発して大規模に提供しようと先を争うあまり、セキュリティやコンプライアンスがおろそかになることがあります。パブリックなLLMのAPIのような会社が認可していないツールを、文書の要約、顧客とのコミュニケーション、コーディング支援などのタスクで社員が利用する恐れがあるのです。その結果、機密性の高いビジネスデータが適切な統制なしでサードパーティのプロバイダに渡ることになりかねません。

AI時代の企業が業界固有の規制に伴う遅れを回避して開発を加速するためには、リスク軽減戦略を遂行すること、LLMのガバナンスに焦点を当てること、エージェント型AIのワークフローなどの新たな技術への準備を整えることが重要です。

規制やコンプライアンスの懸念を軽視することなく、AIの破壊的なパワーを活用する方法については、eBook [\*\*「Rolling Out AI Projects in Highly Regulated Environments」\*\*](#)をご覧ください。

今すぐダウンロード

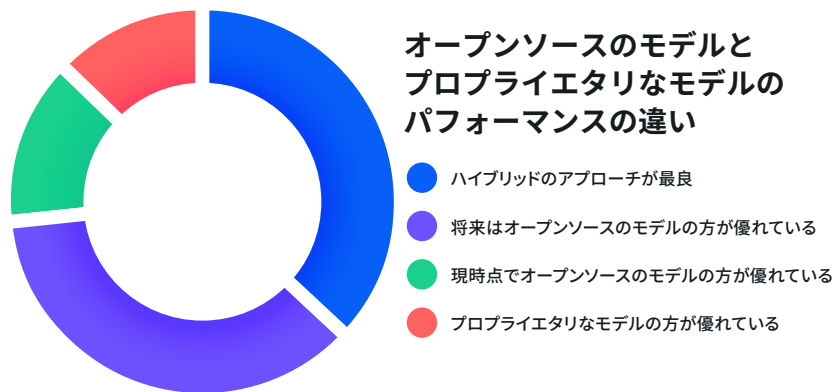


## 51%は現在または今後のオープンソースのLLMはプロプライエタリなモデルより優れていると回答

オープンソースのLLMとプロプライエタリなLLMをめぐる議論からも、企業の慎重な姿勢や、志向の微妙な違いがわかります。

プロプライエタリなモデルは一般ユーザーの支持を集めるかもしれませんが、企業のテクノロジー関係者はオープンソースのモデルの方が、価値が高いと考えているようです。これについて見解を示した人のうちで、**プロプライエタリなモデルの方がオープンソースより優れているとの回答は13%にとどまりました**。オープンソースのモデルの方が現時点で優れているとの回答は14%ありました。

加えて、36%以上的人是、最終的にはプロプライエタリなモデルがオープンソースのモデルを上回ると考えています。一方で、それより若干多い37%の人は、両方の長を組み合わせるハイブリッドのアプローチが最良だと回答しています。

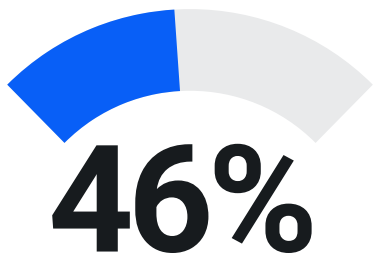


### ハイブリッドのアプローチが理想的と企業が考える理由

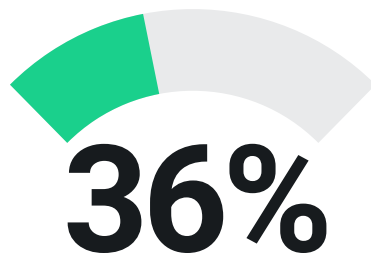
企業には複数のLLMが必要だというのは1つの認識になっているとも考えられます。LLMはそれぞれ異なるタスク向けにファインチューニングされており、チームはニーズに合わせて、クラウド上でホスティングされているプロプライエタリモデルや、ローカルで動作するオープンソースのモデルの中から、複数の異なるモデルを採用する場合があります。その理由としては、LLMの対象分野の違いや、コストの最適化が考え

られます（クラウドでホスティングされているプロプライエタリなモデルでクエリの実行件数が膨大になると、コストがかさむ可能性があります）。

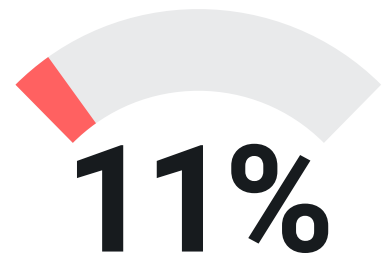
コストを抑えるために、独自のモデルをデプロイして複数のモデルを使用する企業は多くあります。この手法は、コストの削減やハルシネーションの抑制、あるいは、ホスティングされているモデルをフォールバックとして使用することによる可用性の向上につながる可能性があります。



生産性やイノベーションが  
強化されると予想



新たな職務や機会が  
生まれると予想



生成AIはレイオフに  
つながると予想

## AIが会社や自分のキャリアに及ぼす影響について 82%は楽観的

調査に参加した人の大多数は、生成AIが自分の今後のキャリアやイノベーションにプラスの効果を及ぼすと考えています。生成AIが自社にもたらす最大の効果として、生産性とイノベーションを強化する手段になると考えている人は46%、新たなポジションや機会を生むと考えている人は36%でした。

もちろん、今後について楽観的な見方をする人ばかりではありません。しかし、生成AIによってレイオフの可能性が高まると回答した人はわずか11%でした。Kongの[2024年の調査](#)で、生成AIでレイオフが増えると回答していた開発者が約20%だったのに比べると、この見方をする人は減少しています。

興味深いことに、生成AIが自社のビジネスに及ぼす影響はほとんどないという少数派（8%）の回答もありました。こうした見解の背景としては、AIが具体的な成果を生み出す能力についての懐疑的な見方や、導入コストへの懸念、あるいはAIの影響が完全には顕在化していない業界である可能性が考えられます。

# 実験の域にとどまらず、 セキュリティとコンプライアンスを 備えたAI導入へ

LLMの発展は、業界のあり方に大きな変化をもたらしており、驚くべき成長の機会につながります。しかし、新たな発展には新たな課題が付き物です。セキュリティギャップ、コンプライアンスのリスク、統合の難しさなど、企業にとって無視できない課題が生じています。

特に大きな懸念はセキュリティとデータプライバシーです。AIベースのツールの利用が増え、正式な管理統制が及ばないところで利用される場合もあることから、機密性の高いデータの漏えいや、システムへの不正アクセスのリスクがあります。加えて、ハルシネーションや不正確なアウトプットも生じることから、企業は検証の仕組みを導入して、AI生成コンテンツを標準や規制に常に準拠させることがきわめて重要です。

リスクを無視するわけにはいきません。企業は、強固なAPIマネジメントのフレームワーク、セキュリティプロトコル、コンプライアンス統制などで構成される包括的なAIガバナンス戦

略を取り入れて、安全かつ効果的なAI統合を実現する必要があります。優れたガバナンスの軸となるのは、データ保護ポリシーや、ユーザーアクセス制御、継続的な監視、そしてシステムのセキュリティやAI生成コンテンツの統制を維持するためのAI検証プロセスです。受け身の姿勢で臨む企業は、追隨していくこともままならないはずです。また、経験を重ねた企業は、実験の域にとどまるのをやめて、コンプライアンスにのっとった入念な統合へと進んでいく必要があります。

大規模なAPIプラットフォーム施策の一環として、AIゲートウェイなどの適切なインフラを導入する企業は、信頼性、安全性、コンプライアンスを損なうことなく、生成AIのパワーを引き出すことができます。

具体的な施策については、[Kongまでお気軽にご相談ください](#)。また、KongのフルライフサイクルAPIプラットフォームの詳細については、[jp.konghq.com](https://jp.konghq.com)をご覧ください。

## 調査方法

このレポートは、LLM導入のスピードについて、企業にもたらす機会と制約などを考察したものです。インサイトを獲得するために、全米の550人のITリーダー、プロフェッショナル、Kongユーザーを対象とした委託調査を実施し、2025年2月26日～3月31日に回答を得ました。



# Kongについて

APIマネジメントプラットフォームのリーディング企業であるKongは、世界中の企業が「APIファースト」企業になることを使命としています。世界で最も採用されているAPIゲートウェイ上に構築されたKongの統合クラウドAPIプラットフォームは、APIの構築・運用・管理のライフサイクル全体を一気通貫で提供することで開発者の生産性を高めると同時に、高速かつセキュアで拡張性のある製品とサービスにより、ビジネスのデジタル体験を向上させ、イノベーションを加速します。

Kongの詳細については、[jp.konghq.com](https://jp.konghq.com)をご覧ください。Xで[@KongJPN](https://twitter.com/KongJPN)をフォローしてください。

詳しく見る



Powering the API world

[jp.konghq.com](https://jp.konghq.com)

Kong株式会社  
[japanmarketing@konghq.com](mailto:japanmarketing@konghq.com)

東京都港区赤坂9丁目7-1  
ミッドタウン・タワー18階